

第7回(昭和50年度)日本映画照明技術者協会 照明技術賞

劇映画部門	技術賞 「同胞」	担当 青木好文(松竹支部)
劇映画部門	奨励賞 「東京エマニエル夫人 個人教授」	担当 熊谷秀夫(日活支部)
CF部門	技術賞 「ポーラマキファール75・秋」	担当 長谷博(東北新社)
TV映画部門	該当作品なし	非劇映画部門 該当作品なし
特撮映画部門	出品作品なし	

劇映画部門 技術賞 「同胞」 松竹作品



松竹支部 青木好文

昭和2年7月2日生

昭和23年6月 松竹大船撮影所入社。昭和36年「熱
ゆる若者たち」(監督篠田正浩・撮影小杉正雄)を第
一回担当し、以後山田洋次監督・高羽哲夫撮影技師
との作品を主として担当する。主な作品に「男はつ
らいよ」シリーズがある。

選定理由:「同胞」の照明は綿密且つ大胆な照明設計のもとに、
セットとロケセットのつながりを完全にし、殊に松尾中学校体
育館ロケに於いては多数のライトを巧妙に駆使し、また四季を
通じた長期に亘る配光も、些かの破綻もなく全編を通じて撮影
効果を盛り上げ、作品内容を充実せしめた照明技術は、昭和50
年度の照明技術賞に値するものと認める。

劇映画部門「同胞」照明スタッフ

麓川仁志・宮原敬・大川修・田代保・戸張昭次
八亀実。

劇映画部門 奨励賞

「東京エマニエル夫人個人教授」

日活作品



日活支部 熊谷秀夫

昭和3年11月1日生

昭和22年 大映京都撮影所入社。昭和30年日活撮
影所入社。昭和32年技師となり、現在に至る。代表
作品「無頼シリーズ」戦争と人間(第3部)最近作
「屋根裏の散歩者」

選定理由:「東京エマニエル夫人個人教授」の照明は従来の
ロマンポルノ映画の困難な制約のもとで巧妙にライトを駆使し、
硬軟適切な配光をし、一貫した優れた映像を作りあげた照明技
術は、永年の研鑽と努力によるものとし、昭和50年度の奨励賞
に値するものと認める。

CF部門 技術賞

「ポーラマキファール75・秋」 東北新社制作

長谷博

昭和10年3月30日生

昭和28年 連合映画入社。昭和34年 東映TVプロ
入社。昭和40年 東北新社入社。代表作品白鶴「つ
るの恩がえし」 ナショナル「ゴッドファーザー」等
がある。



選定理由:「ポーラマキファール75・秋」の照明は製作意図
をよく理解し、短い映像時間の中で商品、人物、雰囲気と渾然
と融合させ優れた映像を作りあげた技術は、昭和50年度の照明
技術賞に値するものと認める。

CF「ポーラマキファール75・秋」照明スタッフ

日野菊丸・山上明・藤田英寿

「資料」 同胞

「同胞」これは演出の作品である。照明技法が表面に
チラツカない様、十分表現に留意し、配、彩光には自然
光を基調とした照明設計のもとで、忠実にこれを実行
した。先ずこの作品で照明技術賞を狙う意志を照明
スタッフに伝えたところ、幸いにして十二分の理解と
協力を得ました。また本協会各支部の方々からは温かい
激励の言葉を頂き、協会員としての誇りと喜びと、
なお一層の責任を強く感じました。各位との約束を果
たせた最大の原動力は何をおいても、皆様方の御理解
と協力と激励の他にはありません。一日の仕事が終つ
て宿舎に戻ると、解放感と充足感の中にも、後悔にも
似た空漠感が胸のどこかにうずいている事は、往々に
してあることです。そんな時の酒宴は、スタッフにと
って何にもまさる活性化剤であり、明日への活力源です。
この活性化剤を控えめにして夜遅くまで、明日のための

配線図を引いてくれた人達や、馴染みの薄いミュージカルのために、キッカケを忘れまいと、懸命に楽器の種類や、音楽を頭の中に入れている人達等。「俺」が「俺」がで映画を作るのではなく、統一劇場のチームも、俳優も、裏方もなくすべてが一体となって、夫々の分担を弁え、よくその意図するところを把握して、一条も乱れずに最後まで表題のテーマに取り組んでくれた事等々。以上はほんの一例にすぎませんが、今回の受賞に係わる重大な要因として高く評価されるところです。最後に統一劇場の皆様、山田組のスタッフ、そして我が照明チームのたゆまぬ努力と、精進とによって照明技術賞の栄に浴しましたことを、誌上より改めて感謝致します。



「資料」

「東京エミエル夫人個人教授」と言えば、あの美しい音楽によって西欧ムードの軟調なる画面を駆使した洋画のエミエル夫人を思い出させる様に、ムード調の映画で今日シリアスなりアリティーのあるライティング方法が要求される中で、数少ない作品である。この西欧ムードを如何に作りあげるか、勿論日本の感覚風土等差異こそあれ、それにそくしてロケ地の選定、主演者の持つムード、セット等上手に重なり合って出来るものであるが、幸いに色々な条件に恵まれ、カメラの方もフランスシャを使用し、シーンによって（バー赤。レストラン橙。室内ブル、クラブ、青を使用）ライトも直射をさけ、レフスボックス等を多く用い、時にはCM調の画面を取入れ常に軟調になる様、ムードを出すことに努力し、成功しました。

審査を顧みて

大映 伊藤 幸夫

選定理由も明記され、技術内容も明らかにされているので、選後評となると蛇足に近い。

そこで照明賞の選定にかゝる審査の状況とか、各自の選評など記してみよう。

人間の創るものに完璧さを求めることを望むのは、余程の天才でないかぎり自体無理である。

ことに映画の技術評や多くの専門技術を抽出し、これを対象として、映画内容全体を見きわめ選評することは、なかなか困難なことである。

例年のこと乍ら選定委員に選ばれた人々の努力と活動は生やさしいものではない。

試写の条件等に関しては幸にも日本映画テレビ技術協会の毎年のご援助に、便乗させていたゞきいつも乍ら感謝している次第。来年度も是非ともよろしく願いたいと念じている。

規約に従うと30数名の審査員だが仕事の関係や何や、かやで、だいたい20数名が集り候補作品を観ることになる。その日見落せばどこかの映画館まで探しにゆき見てこなければならない。仕事にかかれば、だれかを代理に立てて、自分の意向を託すことになる。最終審査日ともなるとひとり一人の厳正中立の価値観による投票と討論の重責で、賞を決める、選定者もなかなかのご苦労が多い。

さて、50年度は8本の劇映画と1本の記録映画テレビ映画一社とCFの10本が候補作品、それぞれ専門分野の技術者が集って、人に観せる映画を作るのだから観る側もこれに参画するだけの責任がある。ことに照明技術は、光の扱い方で作品内容が左右される、映像の総ての基調は、光の扱い方で決まる。

人間一瞬のまばたきに、フィルムの5コマを見過すという、20数人、40数個の瞳が見ているのだからなかなか失敗など許されない。言い訳、弁明は一切不要、作品の出来栄えにつきる。

レンズの甘さ、マイクの影、レフの動き、帰化植物、巾広のネクタイ、ノレンのたゞみ皺、紙で作った壁の皺、スポットライトの扱い、フラッドライトの使い方、影のダブリ、季節感の有無、柱の釘あと、カメラの影、etc…………。

作品内容に不適格なものの総て俎上にのる、これら総てが光で作られた照明の結果でありフィルムはその証拠となる。

誰かがいった「映画は棒である。その一つ一つのショットが積み重って行く、ゆめゆめおろそかに光を扱うことは出来ない。

技術者にとって、表現するための努力とか苦労は当然のことである。その成果を作品内容に示す照明技術の効果、即ち価値である。エンジニアリングとテクニカルを十分に示し創造性を含めることにより評価されるのだ。

賞の選衡に、情緒的愚行はない。

選定委員会に参加して

映放 中谷敏清

毎年一度の協会の照明技術賞の制定は、我々照明者の誠意と技術成果に対する顕賞と、将来への発展を期待し、協会員の仲間としての人間の絆を確認して、技術を学び向上に役立て映像を大切に愛してゆく事を目的としている。それは、我々照明技術者の道義と云うか信義でもあろうかと思える。それだけに選定委員会に参加して、それなりに厳しい責任を感じました。

参加の諸作品に対する選定委員及び協会顧問の意見や感想は、「厳しい製作条件の制約の中で、技術処理を余儀なくされている現実には仕方ないとしても、照明技術者として、作品の内容を正しく理解して創作意図に基づき、照明技術の的確な表現を追求していくこと」を再確認しました。

厳しい程細部に注意して参加作品の技術検討かなされた。議論の中に……作品の特色・特徴を表現する上で、演出者、撮影者と照明者の間に、ディテールについてのニュアンスの違いが問題になる。此の場合、表現方法についてのディスカッションの末、より内容にマッチすると考えられるものが採用される訳だが、その中に照明者の個性を生かし、創意された表現には、それなりの感動が見る者に伝わるだろう。

「技術軽視とも云える今日、日本映画の発展と映像文化の重要性を考え、照明者として後輩に対しての指導意識の伝達を含め、協会の伸展を真剣に考え、大成する為には、それなりの条件や問題を技術者として自分の心に妥協する事なく試練の闘いがなければならない」と指摘する先輩の声が大

きかった。

現代の映像全体からその技術者の置かれてる立場からの意識や技術の才能や特徴を意味づけ体系づける事は、理論や美辞麗句の活字で成り立つものではないが、我々照明技術者の探究する技術の本質欲求の表現は厳しい……。「日活は製作休止状態にあり新しい映画製作方針がボルノ路線であった。先輩や仲間達は前途を案じ今後の進むべき道を真剣に悩み多くの人達が去っていった、10年、20年にも及ぼうとするつきあいが、あっと云う間に断ち切られてゆくのは寂しかった。ボルノ作品を担当する事になって、本人が考えてもいなかった批判と忠告が寄せられた。つまりボルノ映画を担当すれば人格の品位を落とし今後、他社のTV映画CF等が出来なくなるだろうと云う事だった…」と第1号の現場報告を熊谷氏の手記は本人自身の内発的な事だけを云っておられるのではないだろうが、日活に映画製作を再開させた情熱と照明者として作品を完成させた喜びの中で、ボルノ映画であると言う受け取られ方に自分の神経と闘い……「個人教授」で表現された照明技法は、照明器具の使用選択を適確に意図し、ハーフトーンをベースにベテランらしい安定した技術は高く評価された面もあるが。「映像表現の本質は観る人の意識に精神の情操面を高める力のある表現と、知的向上に役立てる感動性を与える深さを訴えなくてはならない。そうした意味では、折角水準の高い定定した照明技術が、個人教授のドラマのストーリーの内容からは、見る人の意識にそれなりの意味の感動性が伝わるのが少なかっただけに残念であり、非常に惜しい事だ」と云われた、伊藤(前)会長の言葉が印象的であった。

豊富な器材・新しい技術 オノ・ライト 研究所

〒160 東京都新宿区東大久保1-464

TEL 03 (356) 1836・7838